

JANES ニュースレター

No. 29-2
Jun. 2022



目次

- ▶ 現地／渡航情報（エチオピア）総選挙・内戦・旱魃
- ▶ フィールド通信
- ▶ 新刊紹介
- ▶ 追悼：河合先生を偲んで

写真1：油と小麦の配給 オロミア州各地から配給品として食糧油や小麦が届けられた。

現地／渡航情報（エチオピア）

総選挙・内戦・旱魃

大場 千景（アルシ大学）

2021年の5月から7月にかけては、人々の関心は総選挙に向けられていた。6月21日に行われた総選挙が近づくとつれて、連邦政府は治安維持に最大限の配慮を払っていた。各地に警官と軍人が配備され、交通機関の夜間移動の禁止や荷物のチェック、バイク使用の禁止と携帯電話の没収、村落と町場間の移動の制限が行われていた。アビィ首相が写ったブルツギンナ党の大看板にも警官が配置される用意周到ぶりを見せていた。エチオピア南部ではOLFの過激派のゲリラ活動が多発していたが、選挙当日は平穏に過ぎた。選挙前後において政治関連のデモや暴動も起こらなかった。選挙結果は、ブルツギンナ党の圧勝であった。ただ、例えば、オロミア州アルシ西県とアルシ東県において多数を占めるブルツギンナ党不支持者が、投票用紙に提示された政党や出馬者には選択肢がないとあって、そもそも投票用紙を受け取らず、選挙の参加自体を拒否したので、選挙結果がどれぐらい民意を反映しているかは不明である。

選挙が終わると、内戦が再開された。連邦政府は、国民に軍への協力を呼びかけたが、志願兵の集まりが芳しくなかった。一部では強制的な徴兵が行われていた。全国の国立大学、省庁、市町村役場の職員の給料の一部が徴収されたり、各企業から莫大な寄付金を募ったりして軍資金を集めた連邦政府が再びTPLF撲滅のための戦いを始めていった。国営放送は、軍事演習の様子を流しながら戦意高揚を図っていた。一方でTPLF軍側でもティグライ州から多くの民間人が兵として参加し、OLFとの連合を行い、アファール州やアムハラ州において戦闘を行いながら、徐々に前線を南下させていった。10月30日にTPLF軍によるアムハラ州北部、アディス・アベバから380km地点の都市ダセの陥落が伝えられると、一挙に事態が緊迫していった。11月3日に緊急事態宣言がなされ、TPLF軍は勢いをましながら、ウォロロ地域の町々を掌握していった。前線がアムハラ州とオロミア州の境にさしかかった11月23日、アビィ首相は、自ら軍の指揮をとる声明を

発表し、戦場に出かけていった。国営放送では、軍服をまとい、前線で指揮をとるアビィ首相の姿が映し出されていた。この時期、TPLF 軍の快進撃と連邦軍の敗退によって社会にはりつめた空気が流れていたが、人々は騒ぐことなくむしろ粛々と日常生活を送っていた。大学では、通常通り講義が行われていたし、私が暮らしているアサラでもアディス・アベバにおいて何ら変わる事のない日常があった。このころ、私は、多くの人々に今後どうなると思うかと尋ねていたが、戦況はどっちに転ぶかわからない、アディス陥落もクーデターも時間の問題かもしれないかもしれないが、どっちに転んでも自分たちの生活にあまり影響はないだろうと考えているようであった。12 月半ばには、TPLF 軍の撤退が報じられていき、人々の間で内戦の戦慄は薄れていった。

内戦が一段落ついた 12 月、内戦にかわって深刻化していった問題は、エチオピアのサバンナ地帯、ハラルゲ、バーレ、ボラナ地域における旱魃である。特にボラナ地域では 10 月の段階で家畜が死に始めていた。私の調査地の一つであるボラナでは、ここ 2 年ほど、雨季の降雨が減少していた。2021 年の 9 月から 12 月にかけての小雨季にボラナは最後の望みをかけていた。10 月に極地的な短期間の降雨を得たが、その後の集中的な家畜キャンプによって僅かな牧草も消費された。

現在、ボラナの一部は、グジ、ゲデオ、シダモの地域に家畜を移動させている。それらの家畜群は、見知らぬ環境で病気になるか、略奪の憂き目にあっている。それ以外のボラナは、放牧する場を失い、比較的降雨と牧草があったヤベロ付近の家畜キャンプにとどまっているか、牧草のなくなった家畜キャンプをあきらめ、ホームステッドにすべての家畜をもどすか、家畜キャンプ先でウシが体力を失い、ホームステッドに戻ることもできず、大量に死んでいくという状況にある。ウシは牧草を求めて歩き回る体力を失い、一日中木陰に座り込んでいる。ボラナは、そうしたウシに干し草や飼料をやるために痩せて安くなったウシを売ってさらに所有頭数を減らしている。

10 月に旱魃報道がでると、オロミア州各地の大学や県などから食糧の寄付が行われていったが、家畜の飼料の配給はほとんどなされていなかった。最もボラナが望んでいたのは干し草や飼料であったが、農耕文化にいきる大多数のオロミア州の人々は、旱魃というと食糧危機や飢饉を想像するらしく、パスタや小麦粉、飲料水などの寄付が多く、寄付の受け入れ者になっている県の役人の着服を恐れて寄付金はなされなかった。また、すべての援助物資はボラナ県の県庁所在地であるヤベロに集まったが、その後援助物資がどのように分配されたのかを追及する者はおらず、援助物資がどこにどれくらい分配されているのか不明瞭で、州政府さえも把握できていなかった。

11 月の時点で未曾有の旱魃と家畜の大量死を確信した私は、干し草と飼料の収集、輸送、分配を行うことを計画し、実行した。私の居住するアルシ地域は、オロミア州で一大穀倉地帯である。そして、農村では、11 月に収穫を終え、干し草が各世帯に蓄えられていた。そこで、私は、アルシ西県の知事に向けあって、農村から干し草の寄付を募ってボラナに輸送することを提案し、その提案はうけいれられ実行された。さらに同地域にはオロミア州所有の複数の農



写真 2・3：羊とウシの死 乾季の中で降る一瞬の雨の中で体力を奪われ、寒さと飢餓の中で死んだ家畜



写真4：干し草の配給

サラレ大学からの援助物資として干し草が届けられた。すべての援助者はヤベロの町でメディアからのインタビューをうける。

場があり、その農場を経営する州営企業にかけあって干し草の7000束の寄付を取り付け、その輸送をオロミア州政府に依頼した。また、私が調査を行っているアルシのガダ組織にも干し草の寄付と収集をお願いした。私自身も各町場にある穀物を原料とした食品を生産している工場主にかけて、生産過程でだされる飼料の寄付を取り付け、飼料をかき集めた。ボラナへの援助を計画していたオロミア州政府管轄の観光課にも飼料を購入し寄付してもらうようお願いした。これらの5つの方向から干し草と飼料を収集し、2022年1月15日に、12000束の干し草、9900kgの飼料を17台の大型トラックで輸送し、5つのガダの役職者の村、宗教的リーダーであるカルの村、旱魃被害の甚大なおよそ1000世帯に対して干し草と飼料の分配をおこなった。

この活動の中で見えてきた援助に関する問題点がいくつかある。第一に、援助物資を送りたくてもオロミア州政府や県は、輸送用のトラックを一台も所有していないことである。物資輸送の際には商人からトラックを借りるため、常に高額な輸送費がかかる。州政府にも県にもその予算がない。従って、州政府は援助物資を頻繁に送ることができない。また、援助物資の受け入れ先であるボラナ県は、各方面からヤベロに集まった援助物資を援助が必要な地域に輸送することができない。第二に、県の援助物資分配体制が整っていない。単発的にやってくる援助物資は、地域全体にいきわたるよう配分量が考えられることなしに、恣意的に配給されている。あるいは一部の援助物資に関する情報をもつ人々の間でだけ独占的に分配されている。

私ができる全ての可能性を駆使してかき集めた干し草と飼料だが、各世帯で3日から10日程度のウシの糧にしかならない。また、ボラナの一部の地域にもたらされただけである。たとえ、毎日この規模の干し草や飼料を輸送し続けることができたとしても、砂漠に水をまくようなもので、根本的な解決にはならない。結局多くのウシが死ぬことになるだろう。ウシの体力があるうちに牛群自体を高地の牧草地に輸送して、雨季がくるまで家畜キャンプをすることができれば、家畜の全滅を阻止することができるかもしれないが、それをボラナに言っても夢でも見ているかのような顔をしているばかりである。次の雨季まで2か月近くある。ウシにはその時間を乗り切るだけの体力はないだろう。私が分配をおこなった次の日、乾季の中で時折降る雨（fulumaata）があった。体力を失った飢餓状態のウシはその雨の中で大量に死んだ。次の雨季がやっても、同じようにウシは死ぬだろう。もうすでに、ウシが全滅してしまった世帯もある。ボラナのクランのあるリーダーは150頭のウシが30頭になって、気が狂ってしまったという。家畜を失い、自殺や精神に異常をきたすボラナが増えていくことになるだろう。ある古老は、今回の旱魃はこれまでにないものであるという。雨が降っても大地にちゃんと牧草が生えない。以前は、旱魃がやっても、ボラナ居住地のどこかに牧草があるところがあって、そこに逃げ込めばよかった。今は、そんな放牧先がどこにも見つからず、逃げ場がないという。旱魃がすぎたあと、ボラナ全体でどれぐらいのウシが生き残ることができるだろうか。そして牧畜を基盤として成立するボラナの文化はどうなっていくのであろうか。

ケニアでのコロナとワクチンと

大門 碧

(北海道大学国際連携機構)

「Pata chanjo, kaa chonjo.」

「ワクチン接種せよ、安全に過ごせ。」

これは2021年の後半戦、ケニア保健省のフェイスブックで掲げられていたスローガンである。「ワクチン接種をする」ことで「安全に過ごせる」というメッセージを強く打ち出していた。

2020年3月13日、ケニアで新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の最初の感染者が確認された。「こんな風に外食しにくくなるかもね。」と同じナイロビ駐在の日本人とレストランで韓国料理に舌鼓を打った日のことだった。直後、ケニア政府は「感染者が確認された全ての国からの渡航者のケニアへの入国を停止」（3月18日）、「深夜のバー及びクラブの営業を停止」（同23日）、「貨物機以外のすべての国際線の運航を停止」（同26日）、「夜間外出禁止令（夜7時から翌朝5時）の発令」（同27日）、「公共の場でのマスク着用を義務化」（4月6日）と、続けて規制を発表した。日常が一変した。私はケニアのナイロビに駐在を始めて半年も経たないところで離れる気はなかった。しかし、夜間外出禁止令下で警察が市民に暴力をふるっていたことや、夕方ベランダで遊んでいた幼児が間違っって撃たれて死亡する事故を聞いて震えた。そしてそのことをめずらしいとは思わない様子のケニア人を見るにおよび、自分の家族の安全を自分では守れないことを痛感し、一時退避帰国を決断した。

1年後、ケニアに戻ってきた私たちを迎えてくれたのは、唾を飛ばす幼いわが子を変わず相手してくれる寛大なケニア人たちだった。子どもたちの学校が再開される一方、私は自宅で仕事を続けるうち、ワクチン接種について耳にするようになってきた。8月には、知人の日本人が別用で病院を訪れたとき、接種をする人が少ないためこのままではワクチンを大量廃棄することになると嘆く病院スタッフから接種を勧められていた。10月になると、たとえばタクシー運転手のなかには、ケニア政府がそのうちタクシー業にワクチン接種を義務化してくる可能性を耳にしたと言って打つ人がいた。また、翌年に実施予定の大統領選挙に向けて、人びとが密集することを考え、感染予防のために打つ人もいた。一方で「そのうち打つ」と、話をはぐらかす人もいた。私の自宅に泊まり込みで家事から育児までを請け負っているケニア人女性も、彼女の夫は仕事場で接種済みとのことだったが、自分は接種する気がないと言っていた。私もなんとなく抵抗があり接種を先延ばしにしていた。12月に入るとケニア政府は、12月21日よりケニアに入国する18歳以上の渡航者に対しコロナのワクチン接種証明書を提示することを必要とすると発表した。上述の我が家で働く女性も、国内移動にも接種証明書を求められるようになって聞いたので接種したいと意見を変えた。私も年末の渡航計画のため公営のクリニックに用意されたワクチン接種会場へ向かった。しかし1回目のワクチン接種から2週間後、体調を崩し、ナイロビ国立病院でPCR検査を受け、陽性結果を手にするようになった。

ワクチン接種2回目の前日、自宅のあるアパートのケアテイカーが、ワクチン接種が原因で死亡したと聞いた。シャ



写真1：ケニア保健省のフェイスブック上でのワクチンに関するポスター(2021年11月25日投稿)

ツをはだけさせ骨ばった上半身をさらけ出して、アスファルトの駐車場に横になっていた彼をよく覚えている。へべれけであることが多かったが、うちの子の名前を呼んでよく相手してくれた。その彼が元旦に亡くなっていた。後日、遺体安置所に訪れ、葬式にも参列したケニア人から話を聞いた。亡くなった彼はワクチン接種の翌日に同僚たちに体調が悪い、ワクチンは打つな、なにかおかしいという電話をかけていたとのことだった。ワクチンが打たれた腕は黒く変色し、ワクチン接種が死因との検死結果も出たという。1回目のワクチン接種の日を思い出した。妊婦が順番を優先されるのを見て、鞆を上着の下に入れて「私も妊婦よ！」と叫び、小金を渡して横入りする外国人に「あの人、妊婦？」とからかい、「早く帰って働かなくちゃなんないんだけど！」と訴えるケニアの女性たちは明るかった。忙しい合間を縫ってワクチン接種に来たかれらは、政府もワクチンもおそらく信じてはいないだろうが、政府に自分たちの生活を邪魔はさせまい、とのすごみがあった。接種直前、携帯電話に「おめでとう、1回目の接種が終わりました」とのSMSが届いた。ここで接種せずに帰っても打ったことになる気づいたが、「2回目？私はまだ1回目。」と無邪気に話す女性たちを放って帰る強い意志も考えもなく、仕方ないと腕をまくりあげた。

私のコロナ罹患を伝えたケニア人のなかにはそれを信じない人がいた。一人はコロナ自体の存在を信じていなかった。「どうしてその検査結果が本当だとわかるのだ。」と強く詰め寄り「本当にコロナがあるならば、人びとが密集して住んでいるスラムは全滅しているはずだ。」と話し、ワクチンに関しては「アメリカがケニア人を洗脳しようとしているんだ。アメリカが作ったものを身体に入れるなんてできない。打つとしたら世界中で俺が最後だ。」と宣言した。もう一人、コロナ罹患を信じようとしなかったのは、私とよく行動を共にし、自身もワクチン接種済のタクシー運転手だ。「君はいつもマスクしてたし、1回目のワクチンも打っていた。ナイロビ国立病院は政府の手先だ。金儲けのために検査をやっている。陽性結果はフェイクに違いない。」と真剣に諭してきた。私にとってコロナの記憶は、ケニアで風邪薬とされるレモン、生姜、はちみつ、そしてニンニクを煮出した熱い汁が喉を通っていくときのヒリヒリとした感覚として残っている。後遺症なく完治した今、ワクチンの効果も、コロナの存在も、それ以上のものとしては実感できない。ケニア人たちに罹患してはいなかったのだと言われると、返す言葉がない。

2022年3月11日、2年近くに及ぶ屋外でのマスク着用義務が撤廃された。「選挙に向けたポリティクス、政治戦略だよ。」と鼻先で笑いながらすがすがしい顔を見せる人びと。庭先であのケアテイカーを見かけないことだけが時々心をかき乱す。政府の強制力に抵抗する人たちも、受け入れた人たちも、双方が健康に生きていきますように、それを願うばかりだ。マスクを未だ手放せない私をあざ笑うかのように、ナイロビの強い陽射しが照りつける。



写真2：「コロナは本当です」から書き出されている大学構内の掲示
(2022年2月8日撮影)

エチオピア内戦と市民

松隈 俊佑

(京都大学アフリカ地域研究資料センター)



写真1：2021年11月4日 アディスアベバは平穏な朝を迎えた。

2021年11月4日未明、アディスアベバ。市内はいつもどおり静まりかえっていたが、私の心境は落ち着かなかった。

11月2日の夜に発令されたエチオピア政府による非常事態宣言を受けて、3日には日本外務省が渡航情報の危険度レベルを「渡航中止勧告」に引き上げた。JICA エチオピア事務所からも関係者に対して緊急退避を検討するよう勧告が出され、現地で国際協力事業やビジネスを実施していた日本人の多くはエチオピアから退避して帰国することとなった。

正直なところ、アディスアベバでの滞在を続けたい気持ちもあった。2020年4月以降、コロナ禍で長らくエチオピアを離れてしまったあと、2021年8月によりやく現地に帰ることができて3ヵ月弱のところであった。しかし、エチオピア北部のティグライ州を拠点とする「反政府勢力」(以下「TPLF」| ティグレ人民解放戦線 Tigrayan People's Liberation Front) が南進を続け、アディスアベバから400kmのところまで進軍してきたとの確たる情報があり、退避した方が安心であることには違いなかった。

日本時間の4日午前中(現地時間の深夜)に日本側の関係者と相談をし、滞在を切り上げて日本に帰国することとなった。通常であれば航空券の変更のみで済むが、コロナ禍においては出国の際にPCR検査陰性証明書が必要となる。夜明けを待ってPCR検査の予約をし、その日のうちに検査を受けて、翌5日に陰性証明書を受け取って6日に出国した。

飛行機に乗り込み座席についたときには複雑な心境を抱いていた。もちろんほっとした気持ちがないと言えば嘘になる。しかし、プロジェクトの活動のさなかで現場を離れることはとにかく残念で仕方がなかったし、政情不安を理由に一目散に現地を離れるというのは、エチオピアの知人友人に心から申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

本稿では、コロナ禍と北部内戦下のプロジェクトを振り返りながら、とくに2021年8月から10月までの現地アディスアベバがどのような雰囲気であったか書き残しておく。

私は2019年4月に開始したSATREPS-MNGDプロジェクト（以下「MNGDプロジェクト」| <https://mngd.africa.kyoto-u.ac.jp>）の研究者兼現地調整員を務めている。MNGDプロジェクトも、2020年3月以降COVID-19の感染拡大の影響を受けた。2020年3月13日にエチオピアでCOVID-19陽性の一例目が報告され、同月27日には市中感染が認められた。その後2ヵ月ほど感染拡大は起こらなかったが、5月以降に感染者が増加した。私は年度の区切りに合わせて2020年3月15日に一時帰国しており、5月までには再度現地に戻る心づもりでいたがCOVID-19感染拡大を受けて現地への渡航を見合わせる事となった。MNGDプロジェクトに関わっている日本とエチオピア双方の研究者も互いに渡航できなくなった。

プロジェクトの現地カウンターパートの一つであるアディスアベバ科学技術大学（AASTU）は、5月にはエチオピア政府によってCOVID-19陽性者及び濃厚接触者の隔離施設に指定され、学生や職員は大学構内から立ち退きしなければいけなかった。MNGDプロジェクトでは現地での実験や社会調査を原則としており、AASTUでの実験活動は主たる活動の一つであったため、プロジェクトの活動は大きく制限される事となった。現地での実験や社会調査が再開できるまで、それぞれ個別に文献調査を実施することとした。

3ヵ月後、2020年8月にAASTUの職員がキャンパスに立ち入ることができるようになった。エチオピア人研究者とオンライン会議を軸に遠隔でのコミュニケーションを継続し、進捗は遅いがプロジェクトの活動を継続した。

そのような期間が1年ほど続いたあと、私は2021年3月に2ヵ月だけ現地に戻った。その後、2021年8月に本格的に現地滞在を再開した。アディスアベバの友人やプロジェクトメンバーとも再会を喜び、活発に活動を再開した。

ところが、エチオピア北部をとりまく情勢については、あまりいいニュースを聞かなかった。2020年11月にエチオピア北部のティグライ州を発端に内戦状態に陥っていたが、エチオピア政府は2021年6月に総選挙を実施した。それまでゲリラ戦を展開していたTPLFがこの時期にメケレを奪還した。8月にはアムハラ州の都市にも侵攻し、徐々に北部から南進を続けて、9月にかけてティグライ州及びアムハラ州の治安が悪化していると報道が出ていた。MNGDプロジェクトは直接的な影響は受けていなかったものの、大学関係者のなかで、大なり小なり影響を受けているものもいた。

ある大学教員は以下のように語った。

私は2019年10月にティグライ州にて現地の建設コンサルタントと一緒に仕事をしたことがきっかけで、アディスアベバの路上で言いがかりをつけられて1年間に3度拘留された。いずれも具体的な罪状がなかったので、2、3日で釈放された。私の友人は、ティグライ州の建設現場で仕事をしていただけをもってして、アムハラ州で拘留されて8ヵ月以上経過した。エチオピアは間違った方向に進んでいるように思えてならない。（2021年8月某日）

この教員はティグライ州出身ではなくエチオピア南部出身であり、決してTPLFを支持しているわけではなかったが、現政権への懐疑も強めている様子でもあった。首都アディスアベバにおいても、エチオピア政府が——意図的かそうでないかはともかく——ティグライ州の組織や仕事に関わった人物について、治安維持を口実にハラスメントを繰り返している事例があることを私は認識した。

また、この内戦は学生の就職活動にも影響を及ぼしていた。ある学生は、内戦の影響で就職の内定が宙に浮いた状態となってしまい、再度就職活動していると語った。

私は2019年にティグライ州のある建設会社から就職の内定をもらっていた。大きい企業だったので、50人ほど内定者がいた。その後、具体的な入社日についてなど会社からの連絡を待ち続けていた。ところが、コロナ禍の影響もあったのかもしれないが、1年以上経っても音沙汰がなかったので再度就職活動することにした。私は手に職をつける目的で土木工学を専攻したが、コロナ禍と内戦で建設会社は大打撃を受けてしまって、働き口がなくなってしまった。技術を身につけても政治によって仕事が失われることは理解していなかった。大学受験を控える弟には土木工学はおすすめしないつもりだ。

10月に入っても北部情勢の事態は一貫して悪化の一途を辿っていた。そして10月30日、緊張感が高まる出来事が起こった。ジブチ港とアディスアベバを繋ぐ要所となっている地域にあるデセとコンボルチャという都市をTPLFが制圧したとの報道が出た。アメリカ大使館は即座にアメリカ市民に対して、エチオピアからの早めの退避を検討するように勧告した。11月2日にはエチオピア政府の非常事態宣言が発出された。

ところが翌3日、アディスアベバの市内はいつも通りの朝を迎えた。ミニバスなどの交通機関も動いているし、市内の渋滞も日常どおりであった。ビルや大学の清掃をしてくれる女性たちも通常通り出勤して仕事をしていた。プロジェクトメンバーも努めて日常を送ろうとしていたように感じたが、私に対しては出国を勧めてくれた。

翌11月4日、私は緊急帰国する決断をした。日常が続くアディスアベバで事態を見守りたい気持ちもあったが安全第一をとることとした。

北部内戦については今後も様々な立場から分析がなされるだろう。2022年3月時点で一部地域を除いては、エチオピア情勢は安定してきている。この時期に現地にはいた立場から痛感したことを1点述べて本稿を締めくりたい。近年、エチオピアに限らず、暴力的な方法で現状を変えようとする政治の動きが続いているが、この煽りを受けるのは最終的には市民である。エチオピアの北部内戦に対しても欧米諸国がエチオピアに経済制裁を科したが、困るのは政治に直接的に関係のない市民である。私は、今回は安全な地に逃げ帰ることのできる立場であったが、今後いつ巻き添えになる当事者となるかわからないことを肝に銘じ、エチオピアの人たちと未来を考えていきたい。

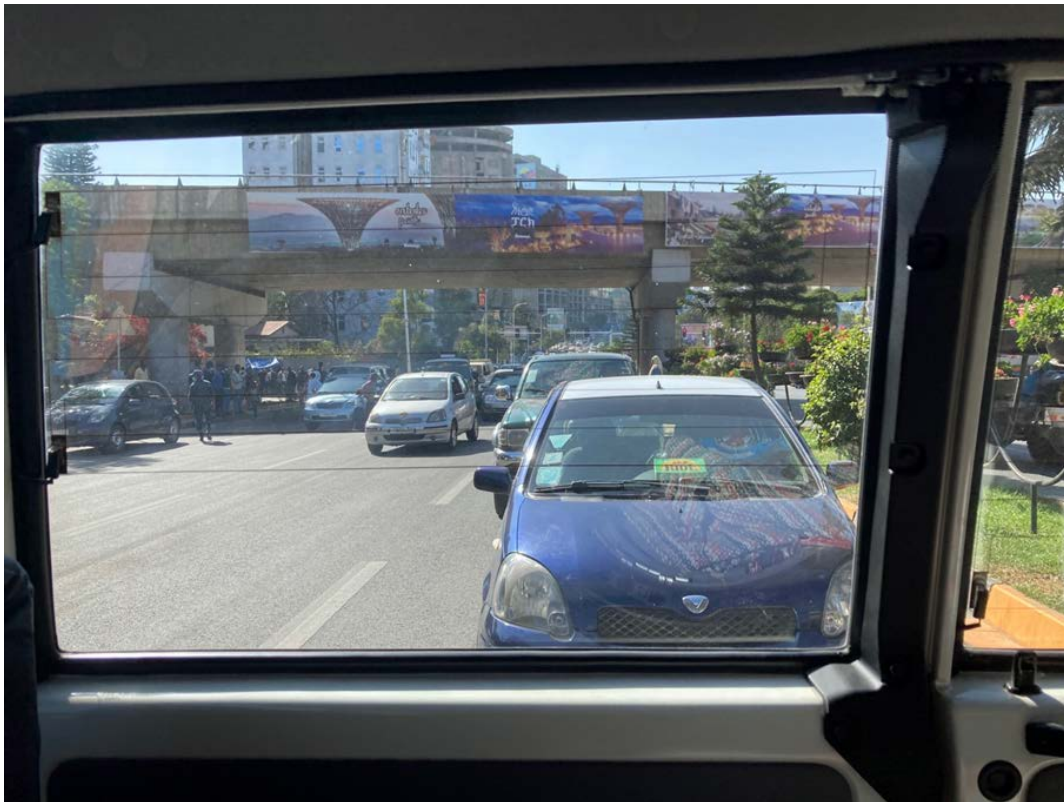
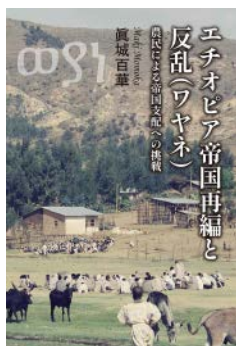


写真2：11月5日 アディスアベバ市内。いつもどおりの交通量であった。

新刊紹介



『エチオピア帝国再編と反乱（ワヤネ）』

眞城百華著、2021年、春風社

2020年11月から続く、エチオピア連邦政府とティグライ人民解放戦線(TPLF)の間の紛争。多くの人があるその動向を注視していることだろう。本書は、凄惨な戦場と化したエチオピア北部のティグライ州を舞台としている。私自身、ティグライ州にはまだ足を踏み入れたことはないが、本書の「ワヤネ」とその一連の過程の詳しい描写に引き込まれ、同州の複雑な現状の歴史的淵源の深部を知ることができたように思う。

ワヤネ(wayyane)とは、1943年8月に約2万人の農民が参加した「反乱」である。彼らは、ティグライ州の二つのエチオピア帝国軍基地を急襲し、州都メケレを占拠した。本書は、著者が述べているように、「鎮圧する側の論理で解釈されることが多かった」ワヤネを、「大きな政治変動に振り回されながら変革の道を模索した」民衆の視点から再考することを目的としている。

著者は、膨大なイギリスとエチオピアの資料分析、そしてティグライ州のワヤネ参加者への聞き取り調査(オーラル・ヒストリー)に基づいて、ワヤネの再検討を行っている。その成果である本書を読むと、執筆に注がれた想像もつかないほどの労力と、それに裏付けられた根拠の力強さに、圧倒される思いがする。

本書は「ワヤネとエチオピアを取り巻く国際関係の影響」、「ティグライ人と中央政府の関係」、「ワヤネの発生から鎮圧までの経緯と実態」の三つを明らかにしている。1930年代からのイタリアによる侵略と撤退、その後のイギリスとエチオピア帝国政府の対立、帝国政府による再支配と強権的な行政改革、そしてそれらを背景にして起こったワヤネ以前の二つの事件。これらすべてが伏線となり、複合的に絡まり合った結果、農民たちによって自発的・主体的に「ワヤネ」が組織化されていったことが、臨場感と躍動感をもって伝わってくる。この紹介では、ワヤネの背景の多面さと、それらがこの歴史的な事件へと収斂していく興味深い過程を表現しきれないが、会員の皆さまにもぜひ本書を手にとっていただき、その感動にも似た感覚を共有できれば嬉しく思う。

著者は、TPLFがワヤネとの連続性を政治的に利用していることを指摘している。本書によって描き出されるワヤネの全体像を知ることが、その政治利用の実態を探り、現在の連邦政府とTPLFとの対立構造の複雑なもつれをほどこいていくための出発点となるであろう。本書は、エチオピア研究者はもちろん、エチオピアの情勢に関心を抱いているすべての人に、お勧めしたい一冊である。

田代 啓(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)



『愛と共生のイスラーム：
現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拝』

石原美奈子編、2021年、春風社

本書は、エチオピア西部オロモ社会において、聖者アフマド・ウマルが人々から崇敬を集めていった過程と、彼のカリスマ性が世代を超えて受け継がれていく様子を描きだした民族誌である。アフマド・ウマルは20世紀初めに西アフリカからエチオピアへやってきたイスラーム神秘主義者である。

本書は、序章と終章に加えて、四部構成の十章立てで構成され、第IV部以外は編者が執筆している。第I部「西部オロモ社会とイスラーム」は、西部オロモ社会と宗教、イスラーム受容の過程について、第II部「カリスマの誕生：アルファキー・アフマド・ウマルの人生誌」は、アフマド・ウマルがオロモ社会でどのように崇敬の対象となったのかについて、第III部「カリスマの日常化：ティジャーニー教団の『土着化』」では、アフマド・ウマルの聖者性がどのように受け継がれてきたのかについて、第IV部「『カリスマ』を取り巻く社会環境の変容」では、墓廟や子孫など、聖者の「カリスマ」を帯びている場所や人を取り巻く社会環境がどのように変容しているのかについてが、それぞれ記述されている。

エチオピアにおいては、ムスリム聖者は「愛と共生のイスラーム」を体現する存在として、ムスリムだけでなくキリスト教徒からも崇拝されており、救済や平和を祈る利他的な姿勢が人々に感銘を与えているという。キリスト教徒と平和的に共存しながら、イスラームの宗教実践も維持するということは「共生」であり、この「共生」の実践は、人間は死を恐れ、平和を望むものだという気づきに根ざしていると編者は指摘している。「共生」の根源には、人間の本性への回帰があるのだろうか。非常に興味深く感じながら読んだ。「愛と共生」を実践したアフマド・ウマルの死後、彼の墓廟の周囲には彼を敬愛する人々による村が形成された。村民たちは彼の精神を受け継ぎ、墓廟参詣にやってくる人々をもてなすことを生活の柱とした。そのために必要な食物などを共同労働によって生産する共同体を構築した(8章より)。この「愛と共生」の連鎖と共同体の形成、そして崩壊に至る事例の記述は、編者の調査体験と政治的背景が重ね合わせられ、いきいきと描かれていた。

アフマド・ウマルは、自らの思想を書き留めておらず、聞き取りなど間接的な方法でしか彼の思想に触れられなかったことに編者はもどかしさを感じていたようだ(序章より)。編者は、30年にわたりこの聖者の研究を続け、調査地ではアフマド・ウマルを研究する日本人として認識されるほどになっている。編者のもどかしさを想像しながら、現地の人々と長年積み重ねてきた対話や語りを読んでみると、私は編者自身が現地でどのような伝説になるのかにも関心を持ってしまった。

金森 謙輔 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)



『途上国の産業人材育成——SDGs時代の知識と技能』

山田肖子・大野泉編著、2021年、日本評論社

本書は、名古屋大学のSKYプロジェクト（Skill and Knowledge for Youth Project）の研究者（研究代表者：山田肖子教授／同大学アジア共創教育研究機構・国際開発研究科）をはじめとする、アジアやアフリカなどの途上国の産業開発、教育・人材育成に関わってきた研究者や実務者と、JICA 緒方貞子平和開発研究所（JICA 緒方研究所）の研究プロジェクト「日本の産業開発と開発協力の経験に関する研究：翻訳的適応プロセスの分析」の研究チームが連携して取り組んだものである。

まずはSKYプロジェクト（<https://skills-for-development.com/>）について簡単に説明させていただきたい。SKYプロジェクトは、1）開発途上国の経済成長と貧困削減のため産業人材の効果的な育成手段を提案する、2）職業技術教育が産業界で必要とされる技能を持った人材を提供できているか特定する、3）技能評価のモジュールを開発し、企業や開発途上国の政府が活用できるように実用化することを目的として2018年に発足した。近年、労働者が職場で生産的かつ効果的に働くためには、学歴の獲得や職業に特化した技能の訓練だけでは不十分であるという考えが広まっている。また特に、実際の状況に適応し、組織で協力して問題を解決する上で必要な「非認知能力（問題解決力、チームワーク力、労働倫理など）」の重要性が指摘されている。こうした観点から、名古屋大学のSKYプロジェクトでは「能力」を多面的に捉えるための独自の技能評価モジュール（筆記試験・実技試験）を開発し、これまで、エチオピア、ガーナ、南アフリカの省庁、公的機関、業界団体などと連携して縫製工場の従業員および職業訓練校の学生を対象に調査を実施してきた。また、雇用主や教員も含めて質問票を配布し、知識や技能に関する意識調査も行っている。技能評価および意識調査の分析結果は政府に報告するとともに、従業員や雇用主にも積極的にフィードバックを行い、生産性や従業員の仕事の質の向上に役立てていただいている。最近では縫製工場の従業員の非認知能力向上に貢献するために、ボードゲームを用いたトレーニング開発も行っている。

本書は、途上国の産業人材育成について「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」に代表される国際潮流を念頭におき、グローバル化時代にどのような技能・知識が求められているのか、技能習得や生産性向上においては何が課題となっているのか、そのために何をすべきかについて、政府、外資・地場企業、インフォーマルセクター、教育機関など多様なアクターに焦点を当て、多面的に考察したものである。本書は三部構成になっており、第1部の理論編では、国際協力や教育の分野で「知識」や「能力」についての議論がどう変遷してきたか、グローバル・バリューチェーンの中で生産性向上がどのように議論されているか、産業人材育成政策と産業政策はどのように関係しているかなど、産業人材育成の考え方について取り扱っている。第2部では、途上国における産業人材育成への日本政府（JICA）の援助、民間企業が実施する本邦研修や企業内訓練、政府による職業技能基準や職業訓練カリキュラムの設定など、国家・社会・企業にとって産業人材育成がどのような意味を持つのか、各国の特徴的な事例を用いて制度や組織レベルで考察している。第3部では、SKYプロジェクトがエチオピアの縫製工場で実施した技能評価モジュールの結果を元に、企業が求める知識・技能と学習者が望む知識・技能のギャップや労働者のキャリア形成など、よりミクロな次元から、個人と知識・能力の関係について分析している。

本書ではエチオピアの事例を多く取り上げているため、学会員の皆様からご意見・ご感想をいただくと幸甚である。

島津 侑希（愛知淑徳大学交流文化学部）

追悼： 河合先生を偲んで

重田 眞義

(京都大学アフリカ地域研究資料センター)

河合先生がお亡くなりになってはや1年が過ぎました。日本ナイル・エチオピア学会にとって生みの親でもある河合先生のご冥福をいのり、この場を借りて学会と河合先生の思い出を、やや私ごとと及ぶ話も含めて記しておきたいと思えます。

河合雅雄先生は、1992年3月28日に設立された本学会の初代会長として草創期の学会の基礎づくりに大きく貢献され、その後も名誉会長として常にご指導をいただきました。世界的な霊長類学者として活躍されてきた先生の履歴を伝える新聞や雑誌の記事には、日本ナイル・エチオピア学会の初代会長としての河合先生にふれたものはほとんどなかったようですが、私たち学会員にとっては忘れることのできない大きな存在でした。

河合先生は、丹波篠山市のご出身で、旧制鳳鳴中(現兵庫県立篠山鳳鳴高)から旧制新潟高に進まれ、1952年に京都大理学部を卒業されたのち、今西錦司のもとで動物生態学と人類学を専攻され、アフリカでの霊長類研究の道にすすまれました。1956年に設立された愛知県犬山市の日本モンキーセンターの立ち上げに尽力されたのち、1970年より京都大学教授になりました。先生とエチオピアとの深い関わりは1973年に開始された北部高地でのゲラダヒヒの進化的行動学的研究にはじまります。霊長類研究所長を経て1987年に退官されてからも、日本モンキーセンター所長、日本霊長類学会会長、そして日本ナイル・エチオピア学会会長などの要職を歴任されました。ご出身の地元兵庫県との関わりも大切にされていて、兵庫県の教育委員や三田市の県立人と自然の博物館長、丹波市の公苑長などを長年にわたって務められ、丹波篠山市名誉市民、県立丹波の森名誉公苑長などの称号を受けておられます。

河合先生にはじめてお目にかかったのは、おそらく犬山の霊長類研究所ではなかったかと思えます。もう40年以上も前のことになるので、記憶もあやふやですが、20代前半の学部生の私が生意気にも霊研で開催されたアフリカ学会やホミニゼーション研究会などに顔を出してどこかでご挨拶をした覚えがあります。当時の私は農学部の学生で、栽培植物の進化や起源についてアフリカをフィールドにして学びたいと考え始めていました、といえは後の私のアフリカ農業への研究関心につながっていて聞こえがよいのですが。本当のことをいえば、河合先生や伊谷先生の本を高校生時代に読み、無謀にも京大で霊長類(サル)の研究がしたくて理学部を受験したのですが、入学試験の問題とは意見があわなかったようで、浪人して2年目は日あって農学部に入學したという「わけあり」の学生でした。おかげさまでその後の私のアフリカでの地域研究において、人類の進化や生態人類学的なとらえかたは、農業と栽培植物の進化や起源を考えるうえで常にひとつの道標になってきました。幸運なことに、京都という場所で、河合先生をはじめとする多くの「サル屋さん」とまみえる機会があったことに素直に大いに感謝しているところです。

河合先生は、1973年5月からの約1年間にわたってエチオピアに赴かれ、多くのお弟子さんと共にその後も続くゲラダヒヒの調査を開始されました。今年6月5日に霊長類学会の後援で関係者を中心に京都大学百周年時計台記念館で開催された「河合先生を偲ぶ会」では、当時学生として共にエチオピアの高原でフィールド調査をされた菅原和孝(京都大学名誉教授)さんはじめ幾人の方が当時のエチオピアでの思い出を振り返って話されました。この時代に河合先生がエチオピアという国でフィールドワークをはじめられたことが、その後の日本のエチオピアにおける地域研究に多大な影響、貢献をもたらしてくるようになりました。

私と河合先生とのアフリカでの接点は、1978年になって、学部3回生のとき探検部の学生としてスーダンの南部へでかけるまでの準備に滞在していたケニアのナイロビにはじまります。その年の8月、なかなかとれないエチオピアへの入国ビザの発給を待つ霊長類研究所の庄武孝義先生(京都大学名誉教授)と、ナイロビの学振オフィス(日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター)の留守番をしていた私が、毎日のように黄色いルノーを運転してエチオピア

大使館へ通っていたのを思い出します。当時の学振駐在をされていた霊研の大沢秀行先生も河合先生の研究グループのメンバーでした。このときナイロビ経由でエチオピアに向かわれた河合先生におめにかかることはありませんでした。

さて、日本ナイル・エチオピア学会は、アフリカ学会があるにもかかわらず、同じアフリカの地域を含む地域研究学会として1992年3月28日に立ち上げられました。その初代会長、生みの親が河合先生です。ナイルエチオピア学会は、河合先生の強い意向もあって、設立当初から、文理融合的で、かつ開発実践や企業活動に関わる人たちをメンバーに迎えた多分野融合的な色彩の強い学会として組織されました。今年、第31回学術大会がアジア経済研究所主催のもと開催されました。会員数は当初は300人近い数をほこりましたが、今は百数十名のこじんまりした、まとまりのある学会になっています。小さいながらも、設立当初の精神は受け継がれているものと思います。学会員の皆様ならよくご存知のように、英文雑誌 Nilo-Ethiopian Studies を刊行し、若手を奨励する高島賞をもうけています。

この賞のもとでとなる基金は、河合先生のご研究や著作を通じて親交のあった、大阪府にある共英製鋼株式会社の当時社長でおられた高島浩一氏（故人）からいただいたご寄付によるものです。1992年の高島基金創設以来、今年まで22回にわたり、合計22人の受賞者が選考され、その多くが各界で職を得て多方面に活躍しています。高島賞受賞者には、賞金30万円に加えて共英製鋼株式会社より別途副賞として記念品が贈られるというたいへんありがたい機会となっています。小規模な学会でありながら継続的に英文雑誌の出版が可能なのも高島基金のおかげです。河合先生の人徳とご尽力をつうじて、日本ナイル・エチオピア学会が対象とする研究、特に現在までのエチオピアとその周辺地域における地域研究が栄え、人材が輩出されてきたことは間違いありません。

エチオピア研究という分野は、世界にも広がっていて、3年に一度、400人を超える研究者が世界中から集まって国際エチオピア研究学会を開催しています。1991年にエチオピアの首都アジスアベバで開催された第11回国際エチオピア研究学会の場で、6年後の1997年12月の京都開催が決まりました。実のところ、この国際学会の京都開催の受け入れを一つの契機として日本ナイル・エチオピア学会が作られた、ということになります。京都岡崎にあったホテル・サンフラワー京都（現ホテル平安の森京都）を主会場に開催された第13回国際エチオピア研究学会は成功裡に終わることができました。そのあとも、裏方を務めた私たちに会うたびにねぎらいとお褒めの言葉をいただいたことは、常に大きな力となりました。河合先生は、名誉会長になられてからも、運営幹事会という学会の執行部の会議に毎年でてきてくださり、時には励まし、時には優しく苦言を呈して、学会の運営を常に見守っていただきました。稀にご都合がつかなくても必ずFAXやハガキや電話で連絡をくださいました。河合先生は相手の気持ちをよくとらえて、いたわり、常に配慮のある言葉をかけてくださる方でした。

私が、はじめて河合先生と個人的に親しくお話をする機会を得たのは、京都大学アフリカ地域研究センターの助手をつとめていたときに1992年3月から-1993年4月までナイロビの学振オフィスの駐在をつとめた時でした。学部生時代のナイロビから数えて15年後のことになります。この時は、河合先生ご夫妻が、エチオピアへ行かれるときと帰られるとき、特に高度順化のためにしばらくナイロビに滞在され、ゆっくりとお目にかかることができました。千客万来の学振オフィスでの接客に忙しい家人を気遣って、当時小学1、2年生だった息子たちも含めて日本食レストランに招いていただいたことは、今でもよく思い出します。

2012年4月21日、京都で開催した第21回日本ナイル・エチオピア学会学術大会で河合先生の88歳、米寿のお祝いをさせていただきました。赤いiPadに、会員から集めた思い出の写真を入れてプレゼントしました。そのときの河合先生のはにかんだような笑顔が忘れられません。

これからもエチオピア研究に関わる私たちを天国から見守っていただければと思います。これまでの先生の貢献に感謝を申し上げ、改めてご冥福をお祈りします。ありがとうございました。合掌。



写真：1994年12月 河合先生帰国時・アディスアベバ空港にて撮影（庄武孝義先生より提供）
左から河合溪、星野次郎、福井勝義、河合雅雄、岩本俊孝、萩野恵里子、庄武孝義（敬称略）

▶編集後記

ふと気がつけば、エチオピアの地を踏まないまま3年以上が過ぎました。渡航の規制が徐々に緩和されているなかで、今年度、現地調査を検討されている会員も少なくないのではないかと想像します。今号では、臨場感あふれるフィールド・レポートが届けられましたが、少しでも現地の風を感じられたらと思います。また、昨年5月14日にご逝去されました河合雅雄先生を偲び、追悼文をご寄稿いただいたとともに、庄武孝義先生より本学会と日本霊長類学会をつなぐお写真も提供いただきました。あらためて河合先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。（有井晴香）

JANES ニュースレター No.29-2

2022年6月30日配信

編集・配信

日本ナイル・エチオピア学会

編集委員

有井晴香 中澤芽衣 中村香子 松波康男